

「好きこそ物の上手なれ」という言葉について

山下 太郎

「好きこそ物の上手なれ」という言葉がある。これは誤解されやすい言葉の一つである。現代では個性が偏重され、好きなことを伸ばすことがよいことであるという考えが根強い。その結果、「好きでないこと」は「苦手なこと」として、最初から無駄なこととして平気で切り捨てる。このような風潮が学校教育の現場において見受けられる。

「好きでないこと」を強いる「我慢」は個性を損なうと考え、最初から「好きなこと」に絞って取り組めばよいと考える。だが、その結果は単なる勉強のつまみぐいで終わるケースが多い。事実、最初「好き」だったことにもやがて興味が失せ、「好きなものは何もない」と答える若者が年々増えている。

「好きこそ物の上手なれ」という言葉は真実である。だが、「好きなことだけやっていたら上手になる」という意味では決してない。学校教育において、生徒たちは「好きなこと」だけでなく、「好きでないこと」も含めて忍耐強くやり抜くべきなのである。学校の教科であれ、人間関係であれ、苦手意識を克服して（または経験して）こそ真の自信（または幅広い視野）が身につくからであり、その結果、好きなことも一層好きになり、得意になるからである。「好き」の意識を育てるには、「苦手」意識から逃げない心がけが何より大切なのだ。

富士山も、広い裾野があってこそ、高くかつ安定して見える。普通のビルの構造で、あれだけの高さを実現することは不可能である。言い換えるなら、「好き」とか「得意」というプラスの意識は、「好き嫌い」を問わない経験の「幅」が前提になる。

幼稚園では「なんでも食べる子丈夫な子」と教えている。学校教育においても、教師や親は、最初からある限られた目的を設定することによって、子どもたちの「知的偏食」を助長することがあってはならない。

（文責・山下 太郎）

クラス紹介

今月号の「山びこ通信」では、平成18年度秋学期の授業をふりかえり、それぞれのクラスの先生が日頃何を大切に考え、どのような授業を展開しているのか、クラス便りを寄稿していただきました。

時間割 冬学期（平成18年度12月～3月）

（各クラス5名まで）

	4:10-5:10	5:30-6:30	6:40-8:00	8:10-9:30
火	しぜん* (低学年&高学年)	ことば2年 ことば3~4年 ことば5~6年	中1・英語の基本 中2・数の基本 高校・日本語の読み書き	中2~3日本語の読み書き
水		かず1~2年	中2・英語の基本 中3・英語の基本	ラテン語初級講読 ラテン語中級講読A 高校・数の世界
木	ことば1年 かず3~4年	かず5~6年	中1・日本語の読み書き 高1・英語の基本 高3・数の基本	高1~2・数の基本 高2~3・英語の基本 ウェブプログラミング入門
金				ラテン語入門 ラテン語中級講読B

*「しぜん」は、3:50~5:20、隔週の授業です。

小学生の部

『ことば』	低学年(1年)	山下太郎
	低学年(2年)	山下太郎
	中学年(3・4年)	浅野直樹
	高学年(5・6年)	某
『しぜん』	低学年(1・2年)	山下育子・山下太郎
	高学年(3~6年)	山下育子・山下太郎
『かず』	低学年(1・2年)	下村麻紀子
	中学年(3・4年)	福西亮馬
	高学年(5・6年)	福西亮馬

中学生の部

『日本語の読み書き』	中1	某
	中2~3	某
『英語の基本』	中1	山下太郎
	中2	下村麻紀子
	中3	山下太郎
『数の基本』	中1	
	中2	浅野直樹
	中3	

高校生・一般の部

『日本語の読み書き』	高1~3	某
『高1英語の基本』	高1	Fujita
『高2~3英語の基本』	高2~3	山下太郎
『高1~2数の基本』	高1~2	下村昭彦
『高3数の基本』	高3	下村昭彦
『数の世界』	高1~3	福西亮馬
『ウェブプログラミング入門』	高~一般	Fujita
『ラテン語入門』	高~一般	前川 裕
『ラテン語初級講読』	高~一般	前川 裕
『ラテン語中級講読A』	高~一般	山下太郎
『ラテン語中級講読B』	高~一般	山下太郎

講師が「 」のクラスは、受講希望者が2名以上集まった時点で授業開始を検討いたします。

しぜんだより

山下 育子

しぜん雑感

先日の朝、山の上の園庭にいと、ほぼ5分おきに計3回「ズドン」という銃声が南東方向の山から鳴り響いてきました。今までこの山の上から聞いたことのない音だったので、何だか心配になりました。そう言えば最近、東山峰続きのあちらこちらで、ニホンザルの群れやイノシシの被害が随分出ていると耳にします。お寺のお供え物も拝借していく始末だそうです。そして今朝は、早朝より昼間近くまで、威嚇銃かも知れませんが、明らかに大きな銃声は何発も聞こえてきました。朝刊には、中京の街中にサルが出没し、学校の登下校などに注意をはらわれたという記事も載っていました。

イノシシは、エサが足りて危険がなければ同じ場所で過ごす頭のよい動物ですが、食べ物がなければ里に近づくしかありません。キノコ、タケノコ、ミミズやカエルなど何でも食べる雑食性の上、竹柵を作っても1メートル以上ジャンプできるツワモノなのです。するどい嗅覚を逆に利用して薬品を撒いたり、柵を作り対策を施しても長く効果はなく、体力と学習能力があるためなかなか敵わないようです。

幼稚園のあるここ北白川山にも、数年前より山奥からイノシシが毎晩出没しては、まるでブルドーザーを使ったかのように土を掘り起こして荒らしていきます。この山に住む長老の方と話をしましたら、昔はイノシシやサルなどはこの辺りにはそう近づかなかったんだよと仰っていました。イノシシは夜行性なので、日中人前に姿を現すことはないのですが、人間の手による自然開発や、昔のように里山の枝打ちや間伐の手が施されなくなり放置状態にあるために森が暗くなり、低層植物を食べるイノシシのエサ場が減少してしまったのが理由なのでしょう。

またこの山は、孟宗竹の竹やぶが広がり、春にはしぜんクラスの子どもたちと毎年タケノコ掘り体験をしていましたが、ここ数年は、タケノコが土から芽を出すか出さないかのうちに、イノシシが生えている場所と味を覚えていて、すっかり食べつくしてしまうという有り様になりました。落ち葉が溜まり多量の腐葉土が堆積してできた土中では、手の平に乗せるとはみ出すくらいの大きなカブトムシ5齢幼虫がこの秋深まる時季にはたくさん観察できましたが、これもイノシシの大好物のミミズとともにすっかり餌食になってしまう始末です。農作物を育てておられる地域ではさらに問題は深刻です。

最近では、日本各地にクマも出没して多くの被害が出ています。学校の校庭や民家の裏庭まで出没し人間を襲う原因として、人間のテリトリーが山際まで進出しているために、野生動物が人間の住むエリアに入り込むことを躊躇させる見通しのよい空き地スペース(境界エリア)がなくなってしまったのも原因の一つだそうです。高く茂った草木を伐採して視野の広がる境界スペースを設けるなど、人間と動物との距離を作る取り組みをした地域は、出没の回数が格段に減少したと報告されています。

森に住むべき動物たちが人間に被害を与える原因は人間側にもあることを忘れず、昔のように野生動物たちと住み分けができて上手く共存できる環境が取り戻せればと痛切に願い、今後のしぜんクラスでも何か取り組みができないものかと考えているところです。

9月のあるクラス テーマ“日々草，二十日だいこんを植えよう！”

夏休みが終わり秋学期初日の5日、しぜんクラスは再びスタートしました。はじめに、長い夏休みをどのように過ごしたのか、また自然に関わることや家庭で育てている生き物についての内容をふくめ、一人ずつ立って発表してもらいました。突然のことでしたが、ボーイスカウトでのキャンプ体験、小学校校庭でのキャンプや家族旅行の思い出など、筋道たてて解りやすく伝えることができたのはなかなかのものでした。自然日記や大文字の絵なども披露してもらいながら、みんなが元気にしていたことを確かめました。そして後半は、屋外での体験です。

*** The sense of wonder !



「8月20日に8歳の誕生日を迎えました」



大切に育てている昆虫のお客さんも



「家族で大文字送り火を見た絵を描きました」



ニチニチソウを植えたら水をあげよう



ばらばらと、二十日大根の種を蒔く



こうして一つずつ。かすかに土をかける

10月のあるクラス テーマ“ひみつの森へ！ 道なき道をゆく”

この日は、爽やかな秋の日でした。久しぶりに園庭の奥につづく“ひみつの森”へ出かけました。この道は北白川城跡のある瓜生山頂(海拔301メートル)を経て曼珠院方面や狸谷不動尊方面へとつづいています。いつもと変わらず木々が覆うトンネルを抜け、足元の落ち葉のクッションを気持ちよく踏みしめながら歩いていきます。約5分と少し進んだところで広場に出て、そこから東向きに足をのぼし3年生をリーダーに地竜大明神の裏の川まで一気に下りていきます。途中、蛇行しながら下りていく細い道はあるにはあるのですが、木や落ち葉が積み重なり合いほとんどが覆われてしまっているため判断がつかないほどでした。太めの枝を支えに、足の置き場を探り当てながら落ち葉の斜面を全身でバランスをとりながらすべり下りることになりました。それはスリル満点で歓声をともなう坂すべり体験でしたが、先頭を導くリーダーを見習って真剣に声をかけ合い、無事、川の流れる場所まで辿り着くことができました。手足と五感の力をフルに発揮した冒険でもありました。靴の中は土だらけだったかと思いますが、その後の子どもたちからのリクエストの声が多く、私も是非再度訪れたいと思っています。

10月のあるクラス テーマ“御所へでかけよう！ きのご観察・木登り”

前日の雨が上がり、予定通り御所へでかけました。まず、いろんなドングリの種類を拾い観察しました。次に、持参した9枚のキノコカードを見ながら、きのこが持つ5つの部品(かさ、ひだ、つば、くき、つぼ)を予備知識として押さえ、それから実際に周囲の松林のキノコや幼菌を二人一組で探してまわりました。そうして見つけたきのこは、きのこ図鑑で調べてみました。後半は、チャレンジしやすい大木を探して、木登りです。手と足を使いながらしがみついてよじ登れたときには、晴れ晴れとした達成感が感じられます。友だちを助け下から押し上げたりもします。ゴツゴツとした木の皮も自分の木登りを支えてくれた愛着のある存在となり、大きくなってからもその手応えはしっかりと覚えていることなのでしょう。私自身の幼稚園時代は週末土曜日になると父に御所へ連れてもらいました。そこで、小学生の体育姿を見てから憧れとなったはちまきをしめて、細長い道を一直線に父と競争して走る、とても高い雲梯(うんてい)を反動をつけ最後まで諦めず続ける、登れそうな木には片っ端から登りトライしてみる等、暗くなるまで身体を動かしていたことが、今の自分を支える貴重な体験であったのだろうと振り返っています。



松の木の根もとに幼菌があった



これは？毒きのこ“テングタケ”だ



これは何だろう？わかりにくいな



押してあげる、がんばって！



やった、登れた！



だいが高いよ！へっちゃらだね

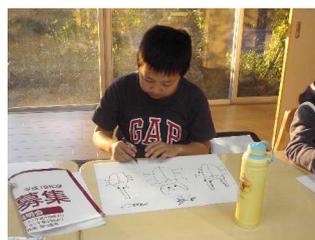
11月のあるクラス テーマ“わたしは誰でしょう？ ネイチャーゲーム”

この日のしぜんは、教室での活動となりました。不思議な(思わぬ軽さ)木の枝を見つけて持ってきた子、ドングリの実を手の平に包んできた子、カシの枝ごと松明をかけるように運んで来てくれた子、そんな自然のプレゼントをみんなに披露しながら全員が揃ったところで、今年は成り年かと思われるくらい沢山落ちていたドングリ、クヌギ、クリの中に卵を産み付けられて住んでいるゾウムシの幼虫～成虫までの成長について考える時間を持ちました。

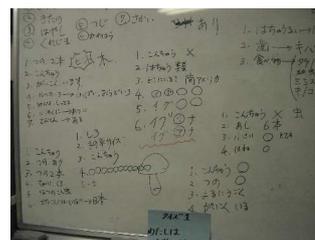
後半は、大きな紙を配り、動物や昆虫の中から好きなもの一つを選んで絵に描く作業をしました。



ヘラクレスリッキーブルーだ



たくさん描いたよ、4つ



質問内容と仲間の答がずらり



クワガタは大好き、力がこもる

それぞれの会心の作が出来上がると、一人ずつローテーションで前に出てきてもらいみんなに背を向け座ります。線った絵の中から一枚をセロテープで背中にペタリと貼ります。本人には絵の内容は見えません。そこで、8つまで質問ができます。このゲームは、動物や昆虫の分類や生態を意識して思い出し、しぜんを楽しむ熱意を呼び起こすことができる時間になったようでした。今後は、森の中のさまざまなネイチャーゲームに取り組んでみたいと考えています。

静かに集中して取り組む時間も仲間ににぎやかに過ごす時間も、楽しかった体験を子どもたちは決して忘れないのでしょうか。そういった体験を重ねていけば、もっと知りたいもっとやってみようと思うようになるのです。楽しさは学ぶ力となります。

(文責・山下育子)

ことばの部

「ことば」1年生 担当 山下太郎

このクラスでは俳句をベースにして、文字の読み書きを学んでいます。毎回、プリントを通じて季節にあった親しみのある俳句を五首ずつ紹介していますが、子どもたちはまずこれらの俳句を暗唱し、続いてプリントの印字をまねて一字一句間違わないように筆写していきます。この時期の子どもたちは、内容理解もさることながら、何より鉛筆を持って文字を書くことに喜びと誇りを持っています。そのちょうどよいきっかけを俳句が与えてくれるという仕組みです。プリントには、何か自分の気持ちや考えを表すきっかけになる質問も混ぜてあります。たとえば、「きょう がっこうで たのしかったことは？」とか「ようちえんのときに いちばんたのしかったことは？」等。プリント学習の後には、お楽しみの絵本タイムです。先日はあまりに秋らしいよいお天気だったので、山の奥にある日だまりの場所（幼稚園では「ひみつの森」と呼んでいます）まで散歩に出かけ、そこで『もりのかくれんぼう』を読みました。森の中で「かくれんぼう」に出会うというお話の中身と、絵本を読む「場」が一体化したため、お話を読み終わったあとも、あたりをキョロキョロ見回していた子どもたちでした。

（文責 山下太郎）

「ことば」2年生 担当 山下太郎

教材と内容は、1年生のクラスと基本的に同じです。小2になると漢字に対するあこがれ（難しい漢字を読み書きしたい）が強くなりますので、プリントでは漢字を用いて俳句を紹介しています（小1ではひらがなのみ）。多少難しい漢字が含まれていても、読みは完璧です。すでに耳で「発音」を覚えているからです。いわゆる幼稚園時代からの素読の成果です。ただ、毎回同じような教材を使うとマンネリ化しますので、今回は俳句の書き取りに挑戦してもらいました。「もう覚えた！」と最初は威勢のよかった子どもたちも、真っ白い紙を目の前にして、いわば「足の届かない」海で泳ぐような不安を味わったことと思います。勉強の基本は足下をじっくり固めることです。簡単に思えることでも何度も繰り返し、揺るぎない自信を身につけてもらえたらと願っています。この日は時間を決めて、自分の気に入った俳句を一つ選び、色鉛筆を用いてそのさし絵を描いてもらいました。できあがった絵を見せあい、互いにそれが何の俳句か当てるゲームをしました。「一所懸命」という言葉がありますが、今は俳句の学習を中心に据えながら、子どもたちの未来の自信の種まきをしています。

（文責 山下太郎）

「ことば」3～4年生 担当 浅野直樹

春学期は初めての担当でしたのでその時々で精一杯でした。秋学期になり落ち着いて、広い視野に立つと生徒の成長ぶりに驚かされるばかりです。

内容は本読み、漢字、創作の三本柱で進めていますので、それぞれについて述べてゆきます。

<本読み>

本を読むことはどれだけ多くても多すぎるといえることはないのですが、一番メインにしています。とにかくいろいろ読めば話の内容から得るものもあるでしょうし、漢字や表現に親しむことができますから。そう思って毎回数冊の本を持っていくのですが、ある時三冊以上読んで物足りなくなりました。春学期と同じような感覚で本を選んでいたら簡単になりすぎていたのです。それから長めの本を用意するようにしましたが、それもすらすらと読めているのでこの時期の生徒の成長には目を見張るものがあります。これからも継続して本を読んでいきたいです。

<漢字>

漢字を書くことにも力を入れています。秋学期には小学二年で習う全ての漢字の書き取りを復習しました。同じ漢字でも読みがたくさんあって苦労している場面も見受けられました。漢字の形とともに表現も身に付けてほしいものです。また、生徒たちが小学生の間に習う漢字の配当表を熱心に眺めている姿も印象的でした。授業時間が少し余ったときに、その配当表から漢字を選んでノートにその漢字を用いた文を自主的に書き始めたということもありました。小学生で習う漢字は配当表の約千字で全てであり、それでほとんどの文章は読めるので、確実に覚えられるようにお手伝いしたいと思っています。

<創作>

創作と呼ぶほど大げさなものではありませんが、自分の思っていることなどを表現することにも挑戦しています。具体的には作文と俳句をやりました。保護者の方からの要望で授業参観という形になったときに作文をやりにして、夏休みの思い出について書き、発表し、一人一言ずつ質問や感想を言い合いました。書き言葉と話し言葉の両方で言いたいことを伝えるいい機会になったと思います。俳句に関しては、これまでに親しんだ経験があるということで、いきなり作ってもらいました。ちょうど秋の様子を授業部屋からよく見え、窓を開けて縁側から栗を拾ったりしながらあれやこれやと考えました。こうした光景も山の学校ならではのことで。

この授業を担当するようになって半年ちょっとしか経っていませんが、全体を通して生徒の成長が目につきました。その成長力を存分に発揮できるような環境を整えられればと思っています。

(文責 浅野直樹)

「ことば」

小学生「ことば」5～6年
中学生「日本語の読み書き」1年/2年
高校生「日本語の読み書き」

担当 某

毎年この時期になると一年を振り返っていろいろと反省しなければならないことも多いのですが、さしあたりは秋学期のクラスの様子をお伝えすることで、来年への道標としておきたいと思います。

ことばの高校生クラスは、いよいよ大学入試に向けて最後のラストスパートをかける時期になりました。秋学期は授業で現代文の問題集を解答・解説し、宿題として現代文・古文・漢文のそれぞれを課題としてやってきてもらい、授業の冒頭で不明な点や自己採点に迷う箇所について質疑応答を行ないました。これは基本的には大学入試が終了するまで、冬学期も続きます。昨年度とは打って変わって、授業のみならず自宅でもかなり大量の問題を扱うことになり、他の科目との時間配分など難しいところも多くなったと思いますが、これまでの実践で習慣化した学習記録表をうまく使って、乗り切ることが出来るでしょう。何より、風邪をひかないように健康を最優先することが大切です。

中学生クラスは、継続してアリストテレスの『弁論術』を読むクラスと、夏目漱石を読むクラスとに分かれています。前者は、内容の読解と、内容に関して考えたことをひとりひとりに話してもらうことにしています。アリストテレスの文章は具体例がたいへん多い。そのなかには、違和感無く受け容れられる例もあれば、そうでないものものあります。なるほどと思うならば、なぜそう思うのか。違うと思うのならば、なぜそう思うのか。日々の経験を思い出しながら、考え方を学んで欲しいと思います。いまはいちばん多感な時期でしょう。いろんな「なるほど」と「それは違う」を感じてください。漱石のクラスでは、「文鳥」を扱いました。小説の筋を丁寧に読解しながら、文鳥をめぐる淡々と進んでいく描写の裏に、どのようなことが隠されているのかを一緒に考えつつ味読しました。漱石が文鳥を眺める眼差しは、かつて彼がどこかで何か／誰かを眺めた眼差しと同じものなのかもしれません。漢字検定の問題集は準2級に入りました。難易度もぐっと上がり、苦戦中ですが復習をしっかりと行い、合格しましょう。それから10月で「文鳥」を読み終え、11月からは「夢十夜」を初めから順番に読んでいます。一読して不可解。しかし、何かが潜んでいます。

小学生クラスは、同じく漱石の「永日小品」を読んでいます。漢字検定の問題集は5級に取り組み、一冊終了しました。年明けからは4級に移行します。漢字の読みはよくできます。書き取りに力を注ぐ必要があるでしょう。まだ知らない漢字を何度も繰り返し練習するということは、なかなか重たい腰があがらないばかりか余計に重たくなるような気がするかも知れませんが、始めてみれば終わるまでの時間はあっという間に過ぎるはず。 「永日小品」は、ひとつひとつの文章のなかに、前後の脈絡とは関係が見えてこないような意外な一文あるいは数文が含まれているのですが、これを発見し、いったい何のためにこのような文章が挿入されているのか、文章の全体とどんな関係がありそうか、これを一緒に考えました。毎回の授業でひとつでもふたつでも、なるほどと思うことを見つけてください。そのために、いつも自分が考えていることとは違うことを発見するためのアンテナをひろく張ってください。

(某)

かずの部

「かず」1～2年生 担当 下村麻紀子 / 福西亮馬

下村麻紀子

この時間は子どもたちが自分自身で選んだドリルを毎週進めていっています。自分でこれをして、と選ぶことで学習に入りやすくなっていると感じます。

2年生の男の子4人は小学校でも一緒に友達ということもあり、様々な思い出や楽しみを共有していてときどき話が学習以外の方へ脱線してしまうこともあります。しかしそのときにただその子の名前を呼ぶだけで自分が今何をすべきかを察知し、再びドリルに取り組んでいます。その時間でドリルがあまり進まなければ自分自身で反省し、九九などの別の方向できちんと自分がかんばったことをほめてあげることもできています。九九でもこの段は全部言える！！などの自信を持つようになったことがすばらしいです。また、最後の15分に『あとそんだけしかできひんの??』と言ってラストスパートをかけてくる子もいて、そのときの集中力は他のどんな誘惑にも負けない力があります。

1年生の女の子2人は、喋ってドリルがおろそかになることもほとんどなく、ドリルを進めています。集中力という面では本当にすばらしく、わからないところもその都度質問もして納得して次の問題へ、といくことができます。2人ともきちんと理解して問題を解くことができる力を持っているので、今後はそれを自信にさせていきたいと思っています。

自信が持てればもっともっと知っていく楽しさを感じることができます。ぜひ、その楽しさをひとつずつ一緒に味わっていきましょう。

(文責・下村麻紀子)

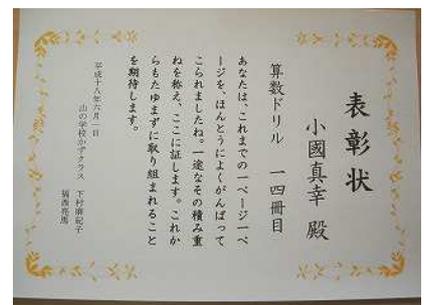
福西亮馬

1年生の頃に、問題の文を1文字ずつ読んでいたのが、いつの間にか段落で読めるようになっていたり、筆算で正確に早く計算できるようになっていたり...と日々いつの間にかしている成長に驚かされています。

しかしこの「いつの間にか」というのは「何もせずとも」というわけではなく、やはりこれまでドリルを何冊も重ねてきた結果だと思っています。また大事なことは、間の一週間の学校においても、きっと先生の方を向いてしっかりと聞いていることだろうと思い、それも大きな栄養源になっているのだと感じます。

2年生は2～3けたの筆算や、5cm2mm - 2cm3mmのような単位の計算、5の段までの九九の暗唱、文章題をしています。あるいはそれまでの積み重ねに応じて、2年生でも1年生の計算や文章題をしています。

1年生は $8 + 5$ 、 $12 - 7$ といった繰り上がり、繰り下が



「大変よくがんばりました！」



ドラえもん「ひみつ道具マラソン」

りのイメージが頭の中にしっかりと焼きつくように手ほどきすることを大切に考えています。

ある2年生が、ホワイトボードに 5×1 から 5×30 ぐらいまで延々とかいて、それを次の週も、そのまた次の週もかいていることがありました。「家で30までかけた」と言って、今度は教室で 5×40 ぐらいまで書く。そのつど 5×1 、 $5 \times 2 \dots$ と前のことを繰り返すわけですが、そこには中学生になっても役立つ勉強のスタイルがあるように思います。人に何と思われようと、自分から何回でも繰り返しやろうとする、それは、幼稚園で鉄棒や竹馬を「すごいねえ」と言っている時と一緒だと思いました。また別の2年生の場合は、6の段も7の段も8の段も9の段も、九九のカードを持って帰りたくて、他の友達が1つしかない8の段を持って帰ってしまったのを「悔しい悔しい」と言っている日もありました。



て、他の友達が1つしかない8の段を持って帰ってしまったのを「悔しい悔しい」と言っている日もありました。

そうした彼らの新鮮な好奇心を「いつの間にか」の油断で枯らしてしまうことがないように、花に水をやるような気持ちで1回1回の授業に取り組みもうと思っています。そうして「次にこれをしたらいいかな?」「これをしたら役に立つかな」と思ってしたことがいつか、彼らの思い出の一部として実を結んでいてくれればいいと思います。

(文責・福西亮馬)

「かず」3～4年生 担当 福西亮馬

このクラスでは、2年前からマイル通帳という代物があって、ドリルを1ページしたら1マイル通帳に書き込みます。宿題でしてきた場合はえらいので2マイル、たまに出される先生問題は割が良くて5マイル etc...そういったことをしながら生徒たちの気持ちを乗せて取り組んでいます。



私自身地図が好きで、昔よく都道府県をぬりながら(1時間に1県とか)勉強していたことを思い出し、地図のパズルを買ってきました。そして3マイル(ドリル3ページ)たまったら1つの県を取り、自分の旗を立てられることにしたら、生徒たちも夢中になってくれて、帰る時になっても「まだ、お願い! あと1ページで、もう1つ取れるんやから!」と言っていました。(宿題でしてくる量も急に増え、宿題の場合は5マイルで1つとルールを変えなければ

ならないほどでした)

「よし、これなら!」と、地図をもう一つ買ってきて、2人で1つの地図を取りあっこしたのですが、それもあっという間に埋まってしまいました。片方の組は、自分たちの取りあったピースが偶然34個ずつだったのに驚いて、「あいこや!...ん!」と握手を求める光景もありました。

また戦国時代も私は大好きで(笑)、次のステージは当時の旧地図を使って「国盗り物語」をしています。今度は1国をさらに10以上の部分に細分化して、なかなか1国が取れないようにしています。そのかわりオプションとして領地の石高を計算してあげ、「1万石につき250人の兵力を動かせる大名」というふうイメージを膨らませて楽

しんでもらっています。(今ではみんな100万石以上の「大大名」(!)です)

私自身この時間は楽しめる時間であり、そして何より、彼らがその間にどんどんと力をつけてくれていることを幸せに感じます。彼らが中学生に上がるまで、どんなことにも夢中になれる今の時期を通して精一杯応援していければと思っています。

(文責・福西亮馬)

「かず」5～6年生 担当 福西亮馬



6年生と言えばいよいよ中学生ですが、それまでにしておくことは、中学校の内容ではなくて中学校に上っても自分で勉強ができる基礎力を身につけることです。従って6年間の内容を文章題のドリルを使って、愚直に1年から通し、どこで自信がぐらつきかけるかを確認することには意味があります。(もし1年のドリルなんて...と思う人はなおさら、あつという間にできるわけですから、ぜひやってみてください)。履歴をたどって最初から全部を自分のものとする

ことは、自分でコツコツとできる、大きい仕事だと思えます。

これがもし算数ではなく引越し屋さんだったら、トラックに積み残した荷物が一つでもあったらすぐお客さんからクレームが来るように、中学校に自分を引っ越しする時にも、積み残しが無い状態で中学を迎えることは大事に思えます。もしも小学校時代に取りにいけるなら別ですが、そこに置き忘れた荷物はたいていの場合取りにいけない、また残っていないというのが現実です(浦島太郎に若返れと言うようなもので、一度失った時間は元に戻りません)。

ドリルというと、計算ドリルからまずは始めるので、よくやっている人でも意外と文章題のドリルに積み残しがあります。一方、この文章題をやりこなしたところから急に算数の自信が芽生えるので、逆に今自信がない人は、そこまでやってから、まだ自分に自信がないかどうかをチェックしてほしいと思います。

またドリルには1回目よりも2回目の方が楽になるという性質があります。それを1回で終わらしてしまうのはもったいないことです。みんななかなかしないことですが、2回目が大事です。同じ計算や自分なりの発見をもう一度確認できる問題に出会った時、勝てる気持ちが生まれ、自信につながるのだと思います。

算数は確かにみんながみんな好きになることはできないかもしれませんが、しかし苦手でもそれを嫌いではないと言える努力はコツコツとだれでもできるはずです。そして苦手と嫌いとは、将来好きになるチャンスを残しているかどうかという点で、大きく分かれ道になっていると思います。ぜひこのクラスでは、「嫌いではない」ということが、何でも無いようで実は自分に大きな財産を残しているということに気付いて欲しいと思っています。

(文責 福西亮馬)

「中2・数の基本」 担当 浅野直樹

このクラスも春学期から引き続き二期目となります。今回は細かい内容よりも大きな話をします。

というのもある日、生徒の一人から疑問をぶつけられたからです。「数学を勉強して何になるの？」

と。これは昔からよく耳にする疑問であり、簡単には解決しそうにはありません。

答えが出なさそうだからといって避けて通るわけにはいきません。生徒たちもそういう疑問が引っかかっている様子です。数学だけに限らず、人生を問う時期でしょう。十年ほど前に同じような経験をした先輩としていっしょに考えていきましょう。

数学を勉強する理由ですぐに思いつくのはテストのため、入試のためといったことでしょう。もちろんこれらも目先の目標としては切迫しています。しかしこれだけではカンニング等の手段を使ってでもテストでいい点を取ればよいということになり、入試に数学が必要とされないなら数学に全く手を着けないという事態になります。

次に思いつく理由は生活に役立つということです。よく反論されるように、確かに生活の中で数学を直接使うことはあまりなさそうです。計算は電卓が代わりにやってくれますし、無理数に出くわすことなどそうめったにはないでしょう。しかし数学的な考え方なら話は別です。仕事や私的な用事で予定を立てるときなどにも必要ですし、それがなければ詐欺や悪い借金でひどい目にあうことも想像できます。論理で解決できない事柄もありますが、論理で解決できる事柄も多いのです。

生活よりさらに踏み込んで、趣味などの活動のために数学が役に立つ可能性もあります。私事で恐縮ですが、私は中学、高校と陸上部で活動していました。大学へ入ってからはやめてしまったのですが、学部の運動科学という授業でカール・ルイスの走り方を研究している先生がいたのです。そうして得られた理論を応用していたらもっと速く走れたかもしれないと悔しい思いをしました。実際に数学（より正確には物理）を活用して成果をあげている走り高跳びの選手を知っています。

ここまで数学を勉強する理由をいくつか検討してきました。最初に断っておいたように、はっきりとした答えが出せるわけではありません。大人になってもそうなのですから、中学生のときにもやもやするのは当然です。周りの人たちも数学を勉強したほうが良いと言うし、やらないよりはやったほうが良いだろうし、わかれば楽しいこともあるので、とりあえずやってみるというくらいでよいと思います。

具体的な授業内容は、学校の進度に沿って一次関数にずっと取り組んでいます。加えてこれまでの復習プリントを授業の最初に少しずつ進めています。数学の問題がわかるようになれば目先の役にも立ち、楽しむこともできるかなと期待しています。

（文責 浅野直樹）

「数の世界」(高校生) 担当 福西亮馬

このクラスには、高校2年生1人と、高校3年生1人に来てもらっています。二人とも数学を学ぼうとする姿勢には「兄たり難く弟たり難し」の言葉が当てはまるようで、教える側としては授業できることを本当に嬉しく思っています。

秋学期、2年生の生徒とは主にベクトルの内積について学習しました。これは大学に進んでから実感することなのかもしれませんが、内積は理工系のさまざまな分野で登場する重要な概念です。逆にこれをおさえると、全体を見渡す視野を得ることができるとも言えます。それなので、単に計算規則として教えられるだけでは、なかなか意味の見えてこない内積について、少しでもイメージを深めてもらおうと思い、直交射影や最小二乗誤差、シュミットの直交化法について話すこともありました。

その直交化法で、実際手を動かして計算してもらっている時ですが、生徒の方から「これが修正項となるのですか？」という言葉が出てきて、「だんだん分かってきました。これが v_1 と直交するための修正項で、これが v_2 と直交するための修正項なのですね」と、式の意味を、ベクトルが次々と正規直交化されていくことのイメージを掴んでくれたことに正直感心しました。その頭の中で響いたことは、またいつか忘れてしまうかもしれませんが、「これがあれなのか」と大学の講義で出てきた時にはより血の通ったものとして学んでもらえるだろうと考えています。

内積はまたベクトルだけでなく関数の世界でも登場し、関数の内積といえば積分の意味で与えられます。その時、積分が得意かどうか問われます。またそこで、どうしてベクトルで考えていたもの(内積)が、関数でも考えられるのかといった点に、「数学って何でもありなの？」と戸惑いを覚えることもあります。高校でしっかりとやった人にとってはむしろそれこそが必然であって、大学ではじめて「数学ってこんなにも柔軟性に富んだものなのか！」という驚きとなるのだらうと思います。そのために今勉強していると書いてもいいと思います。そして数学は一つなので、「ベクトルは得意だけれど積分は...」といった好き嫌いをなるべくせず(好きではなくても嫌いではないようにしておくことが大事です) それぞれが一つにつながった時にその醍醐味を味わえるために、大事に履修しておいて欲しいと思います。

3年生の生徒とは、今は目標である大学の過去問題をしています。彼は整数分野を得意としているのですが、他に確率にせよ、微積分にせよ、ジャンルを問わずに解答しているところを見ると、彼にとって数学の内容はどれも関心事なのだということが分かって頼もしく思います。秋学期最初の授業でも、部屋に入って来るなり「行列って面白いですね」と、学校で習ったばかりのことの嬉しさを述べた後に、自分で作った固有値を求める公式をプリントの裏に書き出してくれました。それはすごいと感想を述べると、次の週はまた「行列の n 乗を求める公式を作ってきました」と見せてくれ、また次の週には、「 $E+A+A^2+A^3\dots A^n=0$ となるような A 」を考えてきて黒板で説明してくれたり、単に高校生をしているのではなくて、大学生でも通用するような高校生だと思いました。たずねてみると、「自分で作った公式なら、覚えるのは好きです」ということで、数学という無人島で、彼なら素手から道具を作りだして暮らせるのではないかとも思われました。

その彼が、あとの数ヶ月間を悔いのないように過ごし目標に向かってくれることを陰ながら応援しています。

(文責・福西亮馬)

英語の部

「英語」

中学生「英語の基本」1年 / 3年
高校生「英語の読み書き」

担当 山下太郎

英語は基本が大事です。英語の基本とは中学で学ぶ内容（英検で言えば3級レベル）です。山の学校では、中学生も高校生も、中学レベルの例文を繰り返し暗記させ、何も見ずにスラスラ英語に訳せる力を養っています（今は大学生もこの力が怪しい）。将来英会話に力を入れるにせよ、中学で学ぶ内容については発音も含め「正確に」「瞬間的に」英語に直せなければ、苦戦を強いられるでしょう。また、生徒にとって気になる入試問題に取り組む上でも、この基礎力の有無は明暗を分けます。受験勉強では、文字をベースとした学習、とくに英文法の力が不可欠ですが、その際ものを言うのは、基本的な例文を暗記する力です。たとえば「5文型」の5番目の例文といえどこれがあれば、と記憶から例文を自在に取り出せる生徒は、学校の授業の説明もよく理解できるはずで、高校生の授業では、基礎力の確認と同時に大学入試の問題に挑戦してもらっています。英文解釈に関しては辞書を引かずに単語の意味を推測させ、問題を解く勘を養っています。英作文は質量ともに歯ごたえのある京大の過去問を中心に、辞書を引かず、いかに凡ミスをせずに合格答案（模範解答に非ず！）をまとめるかに挑戦してもらっています。

（文責・山下太郎）

「中2英語の基本」担当 下村麻紀子

現在は2年生という、学習していく上でだれてしまいがちな大事な時期に立っています。授業では教科書をベースにして進めています。

2年生の教科書の中でわからないところがあれば、1歩ずつ戻ってみてそこがわかるのか、それでもわからないところがあれば1年生の教科書まで戻ってみることもあります。1人1人の習熟度も異なるので、2人に別々の課題を与えることも少なくありません。前に習ったことを『知らない』ではなく、『忘れてしまった』と自分で認識することも大切なことです。その週に教えたことが次の週にまで頭の中に残っている、簡単なことのように難しいことです。宿題はそのための手段です。繰り返し問題を解くことも残していくためには重要なポイントですが残すための手段はいろいろあり、私の中学時代にはお母さんを相手に教科書の読み合いをしていました。きっかけはどんなものでも何かそこに思い出があれば自然と覚えている『もの』が学習であり、知っていく楽しさだと感じます。

彼らにとって英語が単なる『勉強』ではなく、普段の生活のなかに『在る』ものだということを伝えて一緒に学んでいきたいと思えます。

（文責 下村麻紀子）

～コラム～

英語とラテン語

文 / 山下太郎

日本の英語教育では入試で採点できる英語力、すなわち英文法の力を最も重視しています。いわゆる「5文型」の概念も、もとをただせば欧米人がラテン語を学ぶ際に用いた文法書（ルーツはラテン語で書かれたラテン語の文法書）に出てくる概念です。伝統的なヨーロッパの大学ではラテン語を学ぶことが学問を修める上で不可欠の教養とみなされましたが、日本の大学の場合は（ラテン語の代わりに）英文法の力を教養のパロメーターとして重視してきたのです。ラテン語を学ぶ際にはひたすら「アモー・アマース・・・」と単語の活用を暗記し、基本例文をそらんじることが学習の王道とされたように、英語学習においても基本例文の暗記は不可欠です。ということで、英語を学ぶさいにはひたすら基本的な例文を暗記しましょう、という月並みな結論につながるわけです。

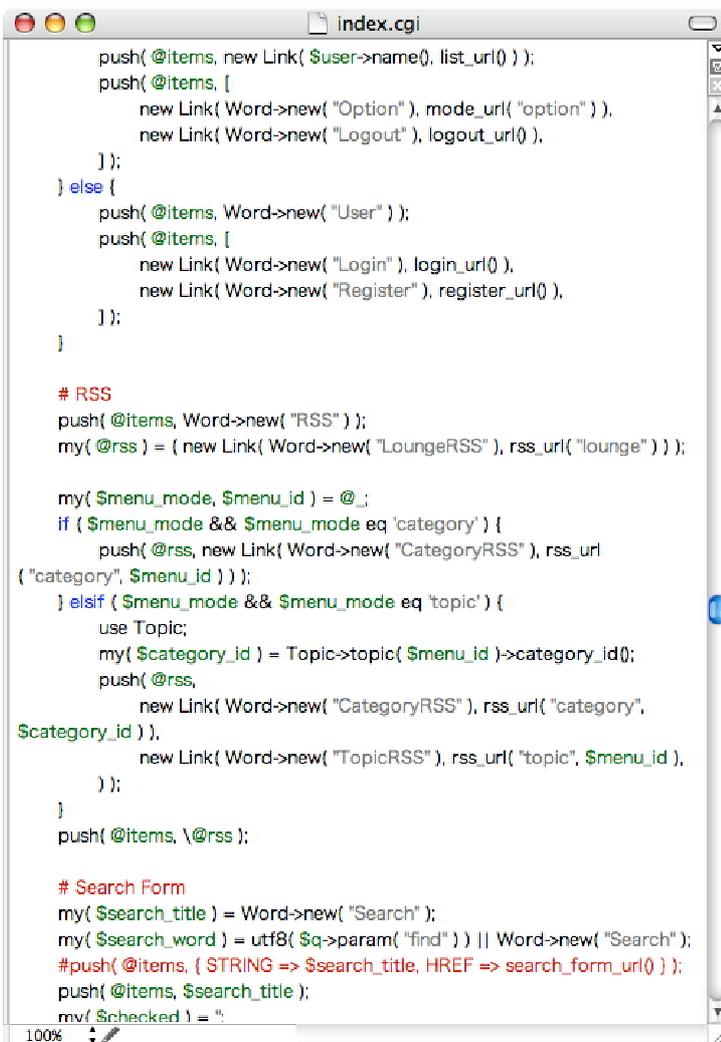
ウェブ・プログラミング入門

時間 木曜8:10~9:30

日程 12月7日~3月14日(12回)

対象 高校・大学・一般

場所 山の学校



```
index.cgi
push( @items, new Link( $user->name(), list_url() );
push( @items, [
    new Link( Word->new( "Option" ), mode_url( "option" ) ),
    new Link( Word->new( "Logout" ), logout_url() ),
]);
} else {
push( @items, Word->new( "User" );
push( @items, [
    new Link( Word->new( "Login" ), login_url() ),
    new Link( Word->new( "Register" ), register_url() ),
]);
}

# RSS
push( @items, Word->new( "RSS" );
my( @rss ) = { new Link( Word->new( "LoungeRSS" ), rss_url( "lounge" ) );

my( $menu_mode, $menu_id ) = @_;
if ( $menu_mode && $menu_mode eq 'category' ) {
    push( @rss, new Link( Word->new( "CategoryRSS" ), rss_url( "category", $menu_id ) );
} elsif ( $menu_mode && $menu_mode eq 'topic' ) {
    use Topic;
    my( $category_id ) = Topic->topic( $menu_id )->category_id();
    push( @rss,
        new Link( Word->new( "CategoryRSS" ), rss_url( "category", $category_id ) ),
        new Link( Word->new( "TopicRSS" ), rss_url( "topic", $menu_id ) ),
    );
}
push( @items, \@rss );

# Search Form
my( $search_title ) = Word->new( "Search" );
my( $search_word ) = utf8( $q->param( "find" ) ) || Word->new( "Search" );
#push( @items, { STRING => $search_title, HREF => search_form_url() );
push( @items, $search_title );
my( $checked ) = "
```

▶概要

現在、多くの人インターネットを利用している。また、その利用形態は様々で、専ら情報収集に活用する場合もあれば、自ら情報を発信する場合もある。インターネットが一般的に流布しているとはいえ、情報発信に利用している人は全体のごく一部でしかない。しかし、受信にとどまらず発信することには、計り知れないメリットがあり、現代の情報社会ではますます重要な地位を占めていくことになることは間違いない。このような、情報発信という発想と技能を身に付けておくことで、今後の情報環境の変化にも柔軟に対応することができる力を養うことができる。

本授業では、このようなインターネットにおける情報発信にテーマを絞って、その具体的な方法の紹介と実習を行う予定です。授業内容は、受講生のコンピュータ、インターネット習熟度によって柔軟に対応しますが、概ねXHTMLとCGI(Perl)を扱う予定です。XHTMLは、インターネット上の情報発信の基礎となる技術で、普段目にするウェブページを構築する言語です。CGIは、ウェブ上のデータを柔軟に活用する手法で、多くの複雑なページで使われています。この他にも、必要に応じて関連分野の諸技術を取り扱うことがあります。

お問い合わせ

学校法人北白川学園・山の学校 〒606-8273 京・左京区北白川山ノ元町4-1

TEL 075-781-3215

taro@kitashirakawa.jp